

哲学とは何か

—生きる意味の問題をめぐって— (1)

佐藤 瑠 威

【要 旨】

19世紀における個別諸科学の成立と発展によって、長い間ヨーロッパにおいて学問の中心的位置を占めてきた哲学は、かつての位置を失い、さらにはその存在理由さえ疑われている。本稿では哲学の存在理由を弁証する立場から、哲学に残された重要な主題として「生きる意味」の問題を取り上げ、なぜ哲学が宗教に委ねるのではなく、この問題を自ら考察すべきであるかを論じる。

【キーワード】

哲学と反哲学、知識愛、神と人間と世界、哲学と宗教と科学、歴史信仰

哲学とは何か。どんな学問においてもその内容を説明するにあたっては、あらかじめその学問が何かを定義し説明することが通例である。その際、他の学問においても、その学問についてのとらえ方が論者によって異なり、その定義が容易でないこともあるであろう。しかし、哲学の場合には他の学問とは次元を異にするような難題が存在し、〈哲学とは何か〉という問題は「序論」として簡単に触れてすませられる問題ではなく、それ自体が学問上のテーマとして徹底した考察を要する問題であると思われる。

〈哲学とは何か〉という問題が他の学問の場合と異なる難問となっている理由はいくつかあげられる。

まず第一に名称の問題がある。すなわち他のほとんどの学問の場合と異なって、哲学という学問の名称はその固有の研究対象を明示していない。周知のように、日本語の「哲学」という言葉は、徳川末期の洋学者西周が翻訳語としてはじめてこの言葉をつくったといわれている。西周は古代ギリシアの「ピロソ피아」の原義（知恵を愛すること）を踏まえて最初は「希哲学」と訳したが、後になって「哲学」という語を用いるようになったといわれる。それゆえ哲学という言葉は特定の研究対象をあらわしてはいない。

名称の問題以外に、〈哲学とは何か〉という問題を困難にしているものはその歴史の長さである。哲学が生まれたのは哲学の始祖とされるタレスが活動していた紀元前6世紀の初め頃であったとされている。それから今日に至るまで2600年間という長い期間にわたって哲学は存在していたことになる。中世のキリスト教哲学を本来の哲学の範疇に入れてよいのかという問題はあるにせよ、哲学が他の学問よりはるかに長い歴史を持ち、その間に様々な変遷を経てきたことは周知

のとおりである。同じ哲学という名称を使っている、古代ギリシアの哲学と中世キリスト教の哲学との間には、同じ学問とはみなし難いほど主題や問題の取り扱い方などに根本的な相違がある。人間の理性に重きを置くデカルト以後の近代哲学もまた神を絶対的な中心とする中世キリスト教哲学とはかなり本質的に異なる思索となっていていく。

しかし、〈哲学とは何か〉が困難な問題となっているのは、とりわけ19世紀以後に哲学と哲学を取り巻く状況の根本的な変化によって、哲学者の間においてさえ〈哲学とは何か〉という問題についての共通の見方がなくなってしまったことにある。このような変化を引き起こした最大の原因は、19世紀半ば以降における個別諸科学の成立である。個別諸科学の成立発展によって、哲学は漸次研究対象を科学によって奪い取られていった。その結果、哲学の研究対象が狭められていっただけでなく、そもそも哲学本来の、固有の学問の対象とは何かということも解りにくくなった。そして諸科学は、その発展を通して絶えず進歩していく学問であるという見方を生み出していった。哲学の世界においては諸科学におけるような判然たる進歩は見出されないから、諸科学の進歩に伴ってやがて哲学は時代遅れのもの、それゆえもはや存在理由を失った学問であるかのような見方が広がっていった。

さらに科学はその科学性、学問的确实性の基準をとりわけ経験的実証性に置く見方を広げていくことによって、実証性に乏しい哲学を学問としての資格を持たないものであるかのような見方も生み出すに至った。確かに、2600年に及ぶ哲学史の大部分に当たるプラトンからヘーゲルに至るまでの時代において、哲学の主題をなしてきたのはアイデアや神であり、世界と人間存在の意味であり、人間の理性・精神・霊魂であり、善や正義や自由であった。これらの存在はすべて不可視であり、それゆえ今日では(神やアイデアや死後の霊魂のように)実際には存在しないとみなされるか、あるいは少なくとも経験的にその存在を証明することが困難であり、学問的探求の対象たりえないか少なくとも学問の手の及ばないものであるとみなされるに至っている。

しかも哲学を学問とはみなしがたいものと考えるこのような見方は、単に科学者の中で抱かれているだけでなく、まさに哲学研究者の間においてさえ有力な見方となるに至っているといわれる。すなわち、伝統的な哲学を本質的に「形而上学」——本当は存在しないものをあたかも存在するものと考え、そしてその存在を最も根本的な、重要な存在とみなすような学としての形而上学——として批判する「反哲学」的な哲学観が広がってきたといわれる。ヨーロッパにおいて、少なくとも19世紀前半までは「諸学の女王」とみなされてきた哲学は、今や学問としての資格まで疑われている状況にある。

19世紀における個別諸科学の成立・発展に伴って、哲学はその学問としての重要性や存在理由を疑われるようになるとともに、哲学とは何かという問いに対する共通した見方も無くなったように見える。哲学は何であったかという問いに対する答えはあっても、人間と社会と自然について様々な科学が生まれ、発展しつつある現代において、哲学とは何か、すなわち哲学固有の主題、研究対象とは何か、そしてその意味は何か、という問いに対しては確たる定義や解答を見出すことは困難であるように思われる。この小論は哲学をめぐるこの難問についてきわめて不十分ながら一つの見方を提出しようと試みるものである。

19世紀以後における個別諸科学のめざましい発展の影響を受けて、学問の世界において哲学の占める位置が大きく変わり、中心的位置を失い、諸学の一つに過ぎないものと扱われ、さらには存在理由を失った学問であるかのようにみなす人も多くいるといえども、哲学が、そして哲学研究者が存在しなくなったわけではない。紀元前4世紀のプラトンから19世紀初めのヘーゲルの時代にいたるまで、ヨーロッパにおいては哲学こそが学問を代表していたのであり、それはヨー

ロッパの学問の歴史の大部分を占めるものであったから、現在の諸科学の知識や思考の起源や発展過程を知るためにも哲学は無視しえないものとしてある。おそらくこれからも当分の間、哲学は現代の諸科学の起源や歴史を知るためだけでも研究の一領域として残り続けるであろう。

しかし、問題は哲学が過去の歴史を知るためだけに必要なものなのか、それとも現代に生きる人間が生きていくうえで哲学的に探究しなければならない問題があるがゆえに哲学は必要なのかを明らかにすることである。われわれは科学の時代といわれる現代においても、依然として哲学的に探究しなければならない問題が存在すると考える。

哲学を批判し否定する動きがはっきりと表れてきた20世紀において、カール・レーヴィットは最も哲学を弁証する立場に立ち、哲学的思考の意義を説き続けた哲学者であった。レーヴィットは、哲学の特色を一方においてその思考態度から考察し、古代ギリシアに生まれた哲学は、救済を求める信仰である宗教とも、自然を支配する道具となる近代科学とも、また世界を変革する実践のための理論であるマルクス主義とも本質的に異なる純粋な知識愛、真理探究であることを強調する。レーヴィットは哲学の特色を他方においてその主題・対象から考察し、古代ギリシアにおいて存在するものの全体としての世界において恒常的に存在するものを考察する思索であった哲学が、中世においてキリスト教の影響のもとに目に見えぬ神を絶対的な中心とする神学的な思考となり、近代においては神に代わって人間を世界の中心において思考する学となり、そして19世紀以後人間は普遍的本性を持たぬ非合理的な実存とみなされて人間の哲学は実存の哲学になり、またマルクス以来世界はもっぱら人間が作る歴史的世界として把握されるようになってきたが、このような変化は哲学が本来の主題を取り違え、見失ってきたのだと批判する。

それゆえ、現代における哲学の衰退は、単に科学のめざましい発展によって哲学が乗り越えられ、存在理由を失ってしまったことだけに起因するのではない。レーヴィットは、純粋な真理愛を持って世界の全体を考察し永遠恒常の存在を探求しようとした古代ギリシアの哲学こそが真に哲学の名に値するものであり、現代において消滅の危機にあるこのような思索を再建することこそが哲学のなくてはならぬ存在理由と意義を明らかにすると考えた。

現代の哲学の状況についてのレーヴィットのこのような見方は、哲学の衰退を個別諸科学の発展との関連においてのみとらえる見方——それはしばしば哲学の衰退・衰亡を不可避的な過程とみなす見方と重なる——とは異なる重要な考えを提示するものである。

哲学の意義についてのレーヴィットの議論は——『知識・信仰・懐疑』、『世界と世界史』、『神と人間と世界』等の著作において展開されているように——、一方において、哲学の特質を純粋な知識愛・真理愛にあるとする思考態度に焦点を置いた見方と、他方において、哲学の特質を全体としての世界の考察にあるとする対象に焦点を置いた見方との両方からなっている。

レーヴィットは哲学的思考の本質を<理性的・懐疑的な知識探究>、純粋な知識愛・真理愛であるとして、それを救済を求める宗教的信仰と対立させるだけではなく、マルクス主義哲学における理論と実践の区別と実践的目的への理論の奉仕(=従属)という傾向を本来の哲学からの逸脱として批判し、さらにフランシス・ベーコン以後の近代の学問において強まっていった学問観——学問は具体的目的に役立ち、現実を支配し操作しうる生産的な学であるべきであるとする見方——をも批判して哲学的思考の特質と意義を強調したが、これは現代における哲学の弁証として最も意味深く説得力のある議論であると思われる。

ただしレーヴィット自身の哲学史研究が明らかにしているように、純粋な知識愛としての哲学的思考は古代ギリシアの哲学に顕著にみられる傾向であって、キリスト教信仰が広まって以後の哲学は徹底した知識愛・真理愛に基づくものとは言い難いものとなっていった。キリスト教を土台とするヘーゲルの哲学を批判し否定して現れてきた実存主義とマルクス主義という20世紀を代

表する現代哲学も、実存的決断や革命的实践を重視して冷静で徹底した真理探究を軽視する傾向を持つものであった。それゆえレーヴィットの哲学の弁証は、哲学を宗教や近代科学やマルクス主義と区別して擁護するだけにとどまるものではない。それは、哲学に浸透して哲学的思考を変質させてきた神学的思考をはじめとするもろもろの思考態度と区別して、原初の古代ギリシアの哲学に生まれた純粋な知識愛・真理愛こそ哲学的思考の本質をなすものとして、今や哲学のなかにおいても消滅の危機にあるこの思考を弁証するものである。

他方、レーヴィットは哲学の特質をくおのずから存在するものの全体として世界>というその考察の対象に見ている。哲学とは異なる科学の特質は、研究対象を限定し、その対象に対して最も有効な方法を用いることによって、可能な限り正確な知識を得ようとするところにある。19世紀以後に顕著に進み始めた学問の専門化は、様々な分野において哲学から分離独立した個別専門科学を生み出すことになった。学問の専門化は多数の個別諸科学を生み出すだけでなく、一つの科学の内部においても専門化を進めることによって、絶えざる学問の「進歩」を実現していつているとみなされている。今日、哲学をもはや存在理由を失った学問とみなすような「反哲学」的な傾向が表れてきた理由は、何よりもこの学問の専門化による個別諸科学の成立と発展とそれによる学問の進歩の過程の進行によって、専門科学におけるような意味での進歩のない哲学を決定的に時代遅れな学問にしてしまったという見方が有力になってきたことによる。

学問の専門化と個別諸科学の成立・発展とがそれぞれの分野において新たな知識を生み出し、人間の認識を進展させ、かくして学問の進歩を促進してきたこと、これに対して哲学は科学の世界における進歩と無関係であったわけではないにしても、科学と同様な進歩を遂げてきたわけではないこと、は確かであろう。

一方において、科学の進歩によって哲学はもはや存在理由を失ったとみなす見方があるのに対して、他方において哲学には科学の進歩によっても無くなることのない独自の意義があるという見方も存在する。哲学の独自の意義を語る場合、最も強調されるのは哲学は全体を考察する学問であるということである。学問の進歩を可能にした専門化は、研究対象を限定し細分化していくことになるが、その個別的な対象が部分として属している全体の認識は科学の考察の対象から除外されてしまっている。全体が科学の研究対象にはなりえないとしても、人間が生きるうえで考察の対象から除外してしまうことはできない。だからこそ哲学は全体の考察を自らの重要な課題としてきた。

レーヴィットもやはり哲学の独自性を全体の考察に見ている。レーヴィットによれば、哲学が全体という言葉のもとに考えてきたのは神と人間と世界であり、図式的に言えば古代ギリシアの哲学ではおのずから存在するものとしての世界が、中世キリスト教哲学では万物の創造主としての神が、近代以後では主体としての人間が哲学の主題をなしてきた。近代の人間中心の見方はヘーゲルにおいて人間が作る歴史を通して世界は変わる、すなわち進歩していくという考えのもとに、世界を歴史的世界、世界史と同一視する極端な見方を生み出すことになった。世界史を全体とみなすヘーゲルからマルクスに受け継がれていくこの現代の哲学に支配的となった見方をレーヴィットは根本的に誤った見方として批判する。そしてレーヴィットは、永遠に変わることのない自然の世界を主題とした古代ギリシアの哲学者の考えこそ最も正しい見方と考える。

哲学の独自性を全体の考察にあるとし、全体を神でもなければ人間でもなく、おのずから存在するものとしての世界にあるとするレーヴィットの主張は、科学に対する哲学の弁証として、そしてギリシア哲学以後の哲学に対する批判として傾聴すべきものである。しかし、哲学が探究すべき世界についてレーヴィットはついに具体的に語ることはなかったように思われる。2000年以上前の古代ギリシアの哲学者の世界論をそのまま受け継いですませるわけにはいかないであら

う。それでは現代の自然科学における宇宙論とは異なるものとしての哲学的世界論というものがある。どのような理論として構想されるものであろうか。こうした疑問に対してレーヴィットは十分に答えることはなかった。

一方において現代の諸科学の発展においてもなくなることはない哲学の独自の意義を主張し、他方において純粋な知識愛の精神を失った現代の哲学を厳しく批判するレーヴィットの哲学論は、現代において哲学の意義とあり方を考えるうえで深い示唆を与えるものである。しかしわれわれは、レーヴィットが斥けた人間を出発点において考える道を探ってみたい。哲学はわれわれ人間という生き物が一定の世界年齢に達した時に考え始めた思索であり、人間の一定の在り方と切り離しては考えられないものなのであるから。

人間を出発点において考えるということは、哲学の対象を人間や人間の生き方に限定するという意味ではない。それは、哲学は人間がそれまでとは異なる或るあり方を取るようになった時に始まる思索であるという意味である。今日、人類の起源は数百万年前に遡ると考えられている。これに対して哲学の起源は紀元前6世紀頃とされている。人類全体の歴史からすれば極めて最近のことになるこの紀元前数世紀前の頃、ギリシアで自然学者が現れ、2世紀足らずのちソクラテスが現れた。同じ頃中国で孔子が、インドでブッダが現れた。ヤスパースが枢軸の時代と呼ぶこの時代にある種の思想革命が起き、人類の思索が一段と深まったのは確かである。この思想革命は人間の意識の在り方の変化によって生じたと考えられる。

ここで生じた意識の在り方の変化を図式的に単純化して言えば、それまで日々の生活に追われ、日々の生活に必要なことのみを考えていた人間は、ここから日々の生活を越えた問題、たとえば、日常生活の視圏を超えた全体としての世界について考え、そしてこの世界に人間が生きることの意味について考えるようになったと思われる。実存主義の哲学、特にサルトルの哲学は、人間にとって存在することは存在することを意識することであるとして人間を<意識存在>と定義している。この<意識存在>としての人間も数百万年に及ぶ人類の歴史の原初においてすでにあったのではなく、歴史のある時点から人間が取るようになった存在仕方であると思われる。そしてこの意識存在としての在り方の深まりとともに哲学的思考が始まることになったと思われる。

この人間の意識の変化、深まりがなぜ生じたかを明らかにすることはできないが、人間は古代のある時期、二千数百年前の頃、日々の生活上の必要事を超えた事柄、たとえば世界について、それがいかにあり、あることにどんな意味があるのか、そして自らの存在をふりかえり、来るべき死と生涯について、いかに生きるべきかについて考え、そしてさらに人間がこの世に生きる意味について深く考えるようになった。人間の意識がこのような問いを問うようになった時人間の思索は新たな段階に入った。それはいくつかの地域で世界宗教あるいはその先駆的な宗教を生み出した。しかしギリシアにおいてはそれは宗教ではなく哲学と呼ばれる思索を生み出した。

通常の哲学史においては哲学は紀元前6世紀の初め頃イオニア地方ミレトスの人タレスを始祖として始まり、最初期の哲学は万物の始原を問う自然学であったといわれる。その最初期の自然学的哲学はソクラテスが登場することによって人間の生き方を問う人間の哲学、とりわけ倫理学となったとされる。ギリシアにおける哲学の始原とその変化についてのこのわかりやすい見方は、最初期の哲学を学問、特にのちの自然科学的学問の始まりとしてとらえる見方を導き出し、ソクラテスの哲学をそれとは対照的な人間についての哲学、特に倫理学の始まりとしてとらえる見方を導き出したように思われる。しかしこのような見方は哲学的思考の核をなすものについての単純化された一面的な解釈を広げるものであると思われる。

哲学は人間の意識の深まりが古代ギリシアにおいてとった独特な思考のありかたである。哲学は確かに徹底して真理を求める学問の起源をなすものであり、宗教とは異なる本質を持つ。しかし人間の意識の深まりが他の地域において世界宗教、普遍宗教を生み出したのとはほぼ同じ時代にあらわれた哲学の中に、普遍宗教に通じるような思索があったとしても不思議なことではない。むしろないほうがおかしいというべきであろう。

人間の意識の深まりは、日々の狭い生活圏を超えて広く世界の全体について思索を広げていくとともに、自己自身をふりかえり、自分自身がなんであるかを考えさせると同時に、この世界において自己が、そして人間が存在することの意味を問わしめる。全体としての世界と世界における人間存在について知ろうとすることと、世界と人間が存在することの意味を問うこととは人間にとって切り離しがたく存在する問題であると思われる。

学問としての哲学は知識愛に発する真理探究であり、生きる意味（という学問的には解決したい問題）は主として宗教が解答を与えようとしてきた問題であった。しかし、人間の意識の深まりとともに避けがたく抱かれるこの問題は哲学にとっても本質的な問題として早くから意識されてきた。

人間は意識存在であることによって不可避的に二つの課題を背負うことになる。一つは、自らの存在と行為に対して責任を負うことである。人間は自分自身を意識し、自分が行っていることを常に意識しているのであるから、彼は自分が行うことに対して責任があることになる。人間は自らの意志で生まれてきたわけではない。この世に生まれてくることは自由な選択ではない。しかしいったん人間として生まれてきた以上は、人間は自由に自らの生き方を選び、そしてその選んだ生き方に対して自ら責任を負わねばならない。これは実存の哲学、特にサルトルが強調することである。もう一つの問題は生きる意味を見出すことである。意識存在は生きることを意識する存在であるから生きること自体が意識的行為となる。他の動物においては生きることはいまだ本能的な営みであるように思われる。しかし人間は意識存在であることによって生きることを意識的に行う、すなわち自由に自らの生き方を選択して生きていかなければならなくなる。生きて行くことを意味づけ、生きて行くことの総体としての人生を意味づけることは、人間にとって避けることのできない問題である。人間が自殺するのは困難に打ち克つてまで生きていこうとするだけの意味を見出せないからである。それゆえ、人間はただ生きていくためにも生きる意味を見出していかねばならない。

生きることを意味づけることは意識存在であることから必然的に生起する問題であるとするれば、人間の意識の深まりによって生じた思索としての哲学において生きる意味が問題とされるのは当然のことである。しかし、古代ギリシアの人間、哲学者たちは近代人のように生きる意味を突きつめた形で問うことはしなかったように思われる。ギリシア人は幸福な生をのぞみ、真の幸福とは何かを考え、幸福になるためにはどうすればいいのかを考えた。彼らの幸福の概念は、過剰に何かを求めるものではなく、しばしば抑制のとれたものだった。ブルクハルトによれば、ほんの短い間、無愛想に世界に召喚されたという意識を、ギリシア人は抱いていたという。すなわちギリシア人は人生を特別に価値のあるものとはみなしていなかったのであり、それゆえ近代人に見られるような価値のある、意味深い人生を求める考え自体がなかったように思われる。

ヨーロッパ精神史においては、このようなギリシア人の抑制のとれた人生観はキリスト教的の世界観、人生観にとって代わられる。キリスト教は現世否定的な世界観と神なき人間の悲惨を説く教説を作った。キリスト教によれば、世界は唯一絶対の神によって創造されたものであり、人間もまた神の被造物であるが、神は人間を特別な配慮をもって、すなわち特別な存在として創造した。しかし、人間は神の教えに反して禁断の木の実を食べたことで罪に墮ちた。この墮罪によっ

て人間は現世においては苦しみの多い悲惨な状態にあり、この状態から救われるためには神の恵みが必要であるとされる。現世は本質的に罪に堕ちた人間が生きる罪深い世界であり、神の恵みによって得られる天国における生こそが人間の真の幸福であるとされる。キリスト教にとっては現世自体は生きる意味のある世界とはみなされていない。現世に生きる苦しみを耐え、乗り越える力は神の恵みと来世に対する期待によって与えられる。神と来世に対する信仰が失われれば、現世は生きる意味を見出すことのできない耐え難い世界となるだろう。ニーチェが直面したのはまさにこのような世界だった。

ツァラトゥストラが「神は死んだ」と宣言したように、長い間ヨーロッパ人に信仰されてきたキリスト教の神——それは信仰の対象であると同時に、真理と道徳と生きる意味を与える存在であった——に対する信仰は19世紀において著しく衰退していった。19世紀は「ヨーロッパの世紀」といわれるように、産業革命と市民革命を経て強力な近代国家となったヨーロッパの国々が世界中を支配しつつあった時代であり、歴史の進歩をまだ信じるのができた時代である。しかし、ニーチェは一人他の人々に先駆けてキリスト教信仰の衰退からニヒリズムが不可避的にヨーロッパに到来することを予言した。ニヒリズムとはまさに世界と世界における人間の存在が無意味であるとみなす意識であり、ニヒリズムに囚われた人間は生きることに意味、価値、目標を見出せなくなる。生きることを意味づけることによってしか人生の困難を乗り越えることができない人間にとっては、それは存在そのものにかかわる危機を意味する。そのことを深く自覚していたニーチェはニヒリズムの到来を来るべき最大の危機とみなし、その克服を自らの哲学の課題とした。ここにおいて生きる意味の問題は哲学の中心的な問題の一つとなった。

ヨーロッパ精神史を通してヨーロッパの人間に生きる意味を与え得たのはキリスト教だけであったと思われる。それは全能の神の存在と神に対する無条件の信頼によって得られるものであった。それは信仰を持つものにいかなる困難をも耐え、克服させうるほどの強さを与えるものだった。しかし、その強さを与えた信仰が強力なものであればあるほど、それが失われた時の反動は恐るべきものとなる。近代における科学と哲学の成立・発展は超自然的な神の存在にたいする信仰を徐々に掘り崩していき、遂に19世紀に至り無神論的見方を広げるに至った。そしてニーチェの予言通り20世紀になってそこからニヒリズムが到来した。20世紀は「戦争と革命の世紀」といわれるように、巨大な戦争と革命とが何度も起き、そのたびに膨大な人命が失われた。20世紀は、「戦争と革命の世紀」であると同時に「ニヒリズムの到来」の世紀だった。表面的には無関係に見えるこの二つの事象の間には深い内面的な関係が存在すると見るべきである。

レーヴィットは神に対する信仰を失ったヨーロッパの人間は、信仰の対象を歴史に移したと言う。すなわち神と来世の存在を信じるができなくなった人間は、現実の世界の彼方に理想の世界が実現されることを期待しようとするというのである。戦争や革命はその理想を実現するために必要なものとみなされる。しかし20世紀の戦争や革命は理想の実現とは到底釣り合わないような甚大な被害をもたらしたし、革命によって実現されると期待された世界は理想とはかけ離れたものとなり、人間から理想への期待を奪い取り、ますますニヒリズムを強めていく結果を招いた。人間にとって現実の世界は生きる意味を見出し難いものであったがゆえに、人間は現世を超えた来世に希望をつなごうとしたが、科学に象徴される人間の知的進歩自体が来世信仰を掘り崩していった。そこで人間は現実の世界そのものを変革することによって理想の世界の実現を企てたが、20世紀に企てられた政治行動はことごとくといっていいほど失敗に終わり、現実の彼方に生きる意味を見出す可能性もきわめて乏しくなったように思われる。ニーチェが予見した問題は現実の問題となり、解決されることなくいよいよ深刻さをましてきている。19世紀においてキリスト教の神に対する信仰を掘り崩していったのが科学的合理的思考の進展によるものだったとし

ても、それは生きる意味についてキリスト教がヨーロッパの人間に与えていたものを与え得るわけではない。

科学は人間が何を生きがいとしているかを経験的な調査で明らかにすることはできても、人間にとっての生きる意味は何かを科学的に論証しようとはしないし、論証できるとは思わないであろう。マックス・ウェーバーが見抜いたように、科学の進歩は世界の意味を明らかにするのではなく、むしろ反対に世界に意味があるという幻想を破壊していくのである。科学の進歩、科学的合理的思考の進展は、長い間ヨーロッパの人間に世界と人間存在の意味についての確信ある見方を与えていたキリスト教の世界観と人間観を掘り崩していったが、個別諸科学はキリスト教に代わる世界観や人間観を提出しているわけではない。

キリスト教信仰の衰退によって生じた世界観・人間観の危機、空隙を埋めたのは主としてレーヴィットの言う歴史への信仰であった。歴史への信仰とは、現代よりもよりよい未来の世界を実現するために働き行動することに生きる意味、生きがいを見出すとともに、理想とする世界が実現される時、人間は生きることに意味を見出すことができるとする見方である。18世紀の啓蒙主義思想は歴史を文明の進歩が実現していく過程としてとらえた。ヘーゲルはキリスト教の立場に立って世界史を神の意志が実現していく精神の進歩の過程としてとらえた。このヘーゲルのキリスト教的世界史観が批判された後に現れた歴史信仰には対立する二つの型がある。一つは産業革命以後の機械技術の発展とそれと結びついた資本主義経済の飛躍的発展、さらに19世紀における科学技術文明の発展は人類を長きにわたって苦しめてきた病と貧困、飢餓から解放し、かつてない豊かで便利な世界を現出させていくものであり、これによって人間は生きがいのある生を享受することができるという見方である。もう一つは唯物史観に基づくマルクス主義の見方である。それはまさにこの資本主義経済の発展が資本家による労働者階級の支配と搾取、疎外を生み出すとして批判して、労働者階級を主体とする革命闘争によって資本主義社会を打倒し社会主義社会、共産主義社会を実現しようとするが、彼らは共産主義社会においてはすべての人間が解放されて自由になり平等になって人間が真に人間らしい生活を営むことができると考えた。

両者はその時代の現実のとらえ方は対立しているが、歴史の未来において人間の理想とする世界が実現されることを期待し、信じる点において共通している。両者のうちキリスト教的世界観にとって代わる意味を持ったのはとりわけマルクス主義であった。マルクス主義は、キリスト教と同じく現実の世界の包括的体系的な認識を与えるだけでなく、現実を科学的に分析し、さらに現代を世界史的に位置づけたうえで、それが崩壊していかざるを得ないこと、そのあとに共産主義社会という理想の世界がやってくることを予言するものであった。

マルクス主義は、近代社会の根本構造をなす資本主義社会を科学的経済学的に把握したうえで、その矛盾、問題点を明らかにし、資本主義社会を変革する主体とその主体による革命の在り方を述べ、そして革命の後に実現されるべき未来の社会の構想まで描いた。マルクス主義は、資本主義社会における人間（労働者階級）の生の状態を疎外論の観点から深く分析し、およそそれが人間らしい生の在り方からかけ離れた惨めなものであると論じた。未来において実現されるべき共産主義の社会においては人間は悲惨な状態から解放され、人間らしい生を生きることが可能になるという。科学的合理的思考の進展によってキリスト教信仰が衰退し、来世への期待を持つことが難しくなった時、マルクス主義は悲惨な現世に生きる人間に希望を与えるという古代ローマ帝国の時代にキリスト教が果たしたのと同様な役割を果たすものであったように思われる。20世紀においてマルクス主義が及ぼした巨大な影響は、来世信仰に代わる未来世界への信仰に近い希望を与える思想であったことに由来すると言える。

それゆえ、ソ連をはじめとする20世紀末における社会主義体制の崩壊は、社会主義に対する期

待が失われたことにとどまらず、キリスト教にとって代って生きる意味を与えるかに思われた新たな世界観が早くも失墜してしまったという問題としてとらえる必要がある。今後マルクス主義がどうなるにせよ、かつてのような宗教的信仰に類するような影響を及ぼすことはないであろう。

マルクス主義とは異なるもう一つの歴史への信仰は、科学技術的資本主義的文明の発展と繁栄が人類にかつてない豊かで便利な世界を作り出し、生きることの楽しさを享受できることになることへの期待に基づくものであるが、マルクス主義のように現代世界の根本的な否定の上に理想世界の実現を企てるようなものではなく、科学技術と資本主義とによって特徴づけられる現代の世界を基本的に評価し肯定したうえで、それがさらに発展することによって理想の世界に近づくと考えるものである。こちらは、マルクス主義のような終末論的期待をかきたてるものではないので、マルクス主義的理想図への幻滅の後でもまだ現代人の歴史への信仰として消滅せずに残っている。しかし、20世紀になって核戦争や環境汚染など人類の存続自体が危ぶまれるような事態の出現によって、科学技術文明の発展に対する素朴な期待は失われ、このもう一つの歴史信仰もマルクス主義に次いで衰退の過程にあると思われる。かくして天国を期待するキリスト教的世界観の衰退後の最も有力な世界観であった世俗的な歴史信仰もその生命力を失いつつあるのが現状である。ニーチェが「神が死んだ」後に到来すると予言したニヒリズムが現実のものとなった20世紀において、現世に生きる苦難や空しさの中で人間に多少とも生きる力、生きる意味を与えていた歴史への期待、信仰もまたキリスト教の神と天国に代わる力を持つものではないことが明らかになったと思われる。19世紀においてニーチェが人間の存在そのものを揺るがす危機を生み、それゆえその克服なしには人間に生きる方途はないと考えたニヒリズムは、21世紀になっても依然として未解決のまま人間の前に横たわっている。

意識存在としての人間にとって「何のために生きるのか」「生きる意味は何か」ということは避けがたく生じてくる問いであり、哲学は人間の意識の深まりを通して生じた思索のありかたであるとすれば、人間にとって生きる意味は何かを問うことは哲学にとって避けることのできない本質的な問題である。人間にとって最も切実であるこの問いをおよそ学問的な対象とはなりえない問題として除外してしまえば、この問題はやはりまた宗教に委ねられてしまうことになるだろう。生きる意味の問題が理性的考察ではなく宗教的信仰に委ねられたとき、そこから非合理的な世界観や行動が生じてくる危険を抑えることは容易ではなくなるだろう。それゆえ生きる意味の問題がいかに学問的な探究になじまない事柄に見えても、哲学はあえてこの問題を可能な限り理性的な考察の対象として考え続けていかねばならないと思われる。

・参考文献：

田中美知太郎『哲学初歩』（岩波全書）

木田元『哲学と反哲学』（岩波同時代ライブラリー）

『反哲学史』（講談社）

カール・レーヴィット『知識・信仰・懐疑』（川原栄峰訳 岩波書店）Karl Löwith *Sämtliche Schriften* 3 『神と人間と世界』（柴田治三郎訳 岩波書店）Karl Löwith *Sämtliche Schriften* 9 『世界と世界史』（柴田治三郎訳 岩波書店）『学問とわれわれの時代の運命』（上村忠男・山之内靖訳 未来社）Karl Löwith *Sämtliche Schriften* 5 『ヤーコプ・ブルクハルト』（西尾幹二・瀧内横男訳 ちくま学芸文庫）Karl Löwith *Sämtliche Schriften* 7

竹内芳郎『サルトル哲学序説』（盛田書店）

ジャン＝ポール・サルトル 『存在と無』 J.-P. Sartre L'être et le néant (松浪信三郎訳 人文書院)

Philosophy has occupied a central position in learning in Europe for a long time. However, by the development and the progress of sciences in the 19th century, philosophy is considered to have lost its own subjects and even reasons to exist. We think that there is the issue of “meaning to live” as one of key issues that are left for philosophy. We consider in this essay why this issue is important for philosophy.